

厚生労働科学研究費補助金
難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

萎縮型加齢黄斑変性に関する調査研究

研究分担者

関西医科大学・医学部・教授 高橋 寛二
東京女子医科大学・医学部・教授 飯田 知弘
九州大学・大学院医学研究院・教授 園田 康平
京都大学・大学院医学研究科・教授 辻川 明孝

研究要旨：平成 27 年から開始した萎縮型加齢黄斑変性の診断基準に基づいて行った全国 2 次アンケート調査による疫学研究のデータ解析を施行し、日本人の萎縮型加齢黄斑変性症例の疫学的特徴を明らかにした。

A. 研究目的

萎縮型加齢黄斑変性は、高齢者の黄斑部での加齢による網膜色素上皮、視細胞、脈絡膜毛細血管の萎縮性変化、Bruch 膜の肥厚・変性に伴って視機能低下を来す疾患である。滲出型加齢黄斑変性とともに加齢黄斑変性の進行期の病型として分類される。平成 28 年度の難病申請が人数の要件で認められなかったことで、日本のポピュレーションベースの本疾患の有病率を出すために、久山町、長浜町、(参考に舟形町) 各スタディの本疾患の基準を調べ、各スタディを統合させて日本における頻度を出し 0.15%未満であることを証明する。

B. 研究方法

- a. 日本における 3 つの疫学研究から萎縮型加齢黄斑変性の患者数を明確にする。
 - b. 重症度別の頻度を調査する。
(倫理面への配慮)
- 本疫学研究にあたっては倫理委員会承認のもと調査を行った。(倫理面への配慮)

C. 研究結果

1. 「萎縮型加齢黄斑変性」として指定難病の申請は目指さない方向とする(推定患者数から難しいと考えられる)。

2. 現在まで分析できた萎縮型加齢黄斑変性の日本人データを論文化する(データとして残しておく)。

3. 網膜脈絡膜・視神経萎縮症に関する調査研究班としての加齢黄斑変性の研究は継続する。

D. 考察、E. 結論

萎縮型加齢黄斑変性に対する対策や治療を考える上で、患者数の明確化と重症度別の頻度調査は重要であると思われる。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

(1) 萎縮型加齢黄斑変性のアンケート調査の結果を英語論文化し、Japanese Journal of Ophthalmology に投稿する準備中である。

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし